

妖術

泉鏡花

青空文庫

一

むらむらと四辺^{あたり}を包んだ。鼠色の雲の中へ、すつきり浮出したように、薄化粧の艶^{えん}な姿で、電車の中から、颯^{さつ}と硝子戸^{がらすど}を抜けて、運転手台^{あら}に顕^{あら}われた、若い女の扮装^{みなり}と持物で、大略^{あらまし}その日の天気模様が察^さしられる。

日中^{ひなか}は梅の香も女の袖^{そで}も、ほんのりと暖かく、襟巻^{えりまき}ではちと逆上^{さか}せるくらいだけれど、晩になると、柳の風に、黒髪^{くろかみ}がひやひやと身に染む頃。もうちと経^たつと、花曇^{はなぐも}りという空^そ合^あながら、まだどうやら冬の余波^{なごり}がありそうで、ただこう薄暗^{うすく}い中はさもないが、処^{ところ}を定めず、時々墨流^{すみなが}しのように乱れかかって、雲に雲^{かき}が累^{かさ}なると、ちらちら白いものでも交^{まじ}りそうな氣勢^{けいはい}がする。……両三日^{さんち}。

今朝^{けさ}は麗^{うらち}かに晴れて、この分なら上野の彼岸^{ひが}桜も、うつかり咲きそうなという、午頃^{ひるごろ}から、急に吹出して、随分風立つたのが未だ^{いま}に止まぬ。午後の四時頃。

今しがた一時^{ひとしきり}、大路^{おほみち}が霞^{かすみ}に包まれたようになって、洋傘^{ようもり}はびしよびしよする……番傘^{しずく}には雫^{しずく}もしないで、俵^{くろ}の母衣^{はろ}は照々^{てらてら}と艶^{つや}を持つほど、颯^{さつ}と一雨掛^かつた後で。

大空のどこか、吻ほっと呼吸いきを吐つく状さまに吹散はきらして、雲切れがした様子は、そのまま晴上あがり
そうに見えるが、淡く濡れた日脚ひあしの根が定まらず、ふわふわ気紛きまぐれに暗くなるから……ま
た直きに降ふつて来きそうにも思われる。

すっかり雨支度あましてくでいるのもあるし、雪駄せつたでばたばたと通るのもある。傘からかさを拵かけて大
く肩かたにかけたのが、伊達だてに行届いたった姿見すがたよがしに、大薩摩おおさつまで押おして行いくと、すぼめて、
軽く手に提ひげたのは、しよんぼり濡れたも好いいものを、と小唄で澄はまして来る。皆足みなあしど
りの、忙せわしそうに見えないのが、水を打うった花道で、何となく春らしい。

電車のちよつと停とまったのは、日本橋通三丁目とおりの赤い柱で。

今言いまったその運転手台へ、鮮麗あざやかに出た女は、南部の表つき、薄形うすがたの駒下駄こまげたに、ちらり
とかかった雪の足袋、紅羽二重こうはぶたえの褸つまさば捌はき、柳の腰なびに靡なく、と一段軽く踏ふんで下りようと
した。

コオトは着きないで、手に、紺蛇目傘こんじやのめの細々と艶のあるを軽く持もつ。

ちようど、そこに立たつて、電車を待まちわせていたのが、舟崎ふなざきという私の知ち己かづき——そ
れから聞いたのをここに記しす。

舟崎は名を一帆かずほといつて、その辺のある保険会社のちよつといい顔で勤しんめているのが、

表向は社用につき一軒廻つて帰る分。その実は昨夜の酒を持越しのため、四時びけの処を待兼ねて、ちと早めに出た処、いささか懷中に心得あり。

一 旦家へ歸つてから出直してもよし、直ぐに出掛けても怪しゆうはあらず、またと……誰か誘おうかなどと、不了簡を廻らしながら、いつも乗つて帰る処は忘れないで、件の三丁目にイみつつ、時々、一粒ぐらいぼつりと落ちるのを、洋傘の用意もないに、気にもしないで、来るものは拒まず……去るものは追わずの氣構え。上野行、浅草行、五六台も遣過ごして、硝子戸越しに西洋小間ものを覗く人を透かしたり、横町へ曲るものを見送つたり、頻りに謀叛氣を起していた。

処へ……

一目その艶なを見ると、なぜか、氣疾に、ずかずかと飛着いて、下りる女とは反対の、車掌台の方から、……早や動出す、鉄の棒をぐいと握つて、ひらりと乗ると、澄まして入った。が、何のためにそうしたか、自分でもよくは分らぬ。

そこにぼんやりと立つた状を、女に見られまいと思つた見栄か、それとも、その女を待合わしてでもいたように四辺の人に見らるるのを憚つたか。……しかし、実はどちらでもなかつた、と渠は云う。

乗合いは随分立籠^{たてこ}んだが、どこかに、空席は、と思う目が、まず何より前に映^さつたのは、まだ前側から下りないで、横顔も襟も、すつきりと硝子戸越に透通る、運転手台の婀娜^{あだすが}姿^た。

二

誰も知った通り、この三丁目、中橋^{なかばし}などは、通^{とお}りの中^{ちゅう}でも相^{あい}の宿^{しゆく}で、電車^{でん}の出^で入^{はい}りが余り混雑せぬ。

停^とまった時、二人三人は他^{ほか}にも降りたのがあつたろう。けれども、女に氣を取られてそれにはちつとも氣がつかぬ。

乗ったのは、どの口からも一帆一人。

入るともう、直ぐにぐい^{ぐい}と出る。

卜前の硝子戸^{がらすど}を外から開けて、その女が、何と！

姿見から影を抜出^{ぬけだ}したような風情で、引返して、車内へ入って来たろうではないか。

そして、ぱつちりした、霏^{うるみ}のある、涼しい目を、心持俯^{ふしめ}目ながら、大きく睜^{みひら}いて、こつ

ちに立つた一帆の顔を、向うから熟と見た。

見た、と思うと、今立つた旧の席が、それなり空いていたらしい。そこへ入って、ごたごたした乗客の中へ島田が隠れた。

その女は、丈長掛けて、銀の平打の後ざし、それ者も生粋と見える服装には似ない、お邸好みの、鬢水もたらたらと漆のように艶やかな高島田で、強くそれが目に着いたので、くすんだお召縮緬も、なぜか紫の裾立つ。

空いた処が一ツあつたが、女の坐つたのと同側で、一帆はちと慌しいまで、急いで腰を落した。

胸、肩を揃えて、ひしと詰込んだ一列の乗客に隠れて、内証で前へ乗出しても、もう女の爪先も見えなかつたが、一目見られた瞳の力は、刻み込まれたか、と鮮麗に胸に描かれて、白木屋の店頭に、つつじが急流に燃ゆるような友染の長襦袢のかかったのも、その女が向うへ飛んで、逆にまた硝子越しに、扱帯を解いた乱姿で、こちらを差覗いているかと疑う。

やがて、心着くと標示は萌黄で、この電車は浅草行。

一帆がその住居へ志すには、上野へ乗って、須田町あたりで乗換えなければならなかつ

たに、つい本町の角をあれなり曲つて、浅草橋へ出ても、まだうかうか。

もつとも、わざとはなしに、一帳場ひとちょうばごとに気を注つけたが、女の下りた様子はない。

で、そこまで行くと、途中は厩橋うまやばし、蔵前くらまえでも、駒形こまがたでも下りないで、きつと雷

門まで、一緒に行ゆくように信じられた。

何だろう、髪のかかりが芸者でない。が、爪つまはずれが堅気かたぎと見えぬ。——何だろう。

とそんな事。……中に人の数を夾はさんだばかり、つい同じ車に居るものを、一年、半年、

立続けに、こんがらかった苦勞でもした中のように種々いろいろな事を思う。また雲が濃く、大

空に乱れ流れて、硝子窓がらすまどの薄暗くなつて来たのさえ、確しかとは心着かぬ。

が、蔵前を通る、あの名代なだいの大煙突から、黒い山のように吹出す煙が、渦巻きかかつて

電車に崩くずれるか、と思うまで凄すさましく暗くなつた。

頸許えりもとがふと気になると、尾を曳ひいて、ばらばらと玉が走る。窓の硝子すかを透しして、雪しずくの

その、ひやりと冷たく身に染むのを知つても、雨とは思わぬほど、實際うわ上の空でいたので

あつた。

さあ、浅草へ行くと、雷門が、鳴出したほどなその騒動さわぎ。

どさどさ打ぶちまけるように雪崩なだれて総立ちに電車を出る、乗合のりあいのあわただしさより、仲な

見世は、どつと音のするばかり、一面の薄墨へ、色を飛ばした男女の姿。

風立つ中を群つて、颯と大幅に境内から、広小路へ散りかかる。

きちがい日和の俄雨に、風より群集が狂うのである。

その紛れに、女の姿は見えなくなった。

電車の内はからりとして、水に沈んだ硝子函、車掌と運転手は雨にあたかも潜水夫の

風情に見えて、束の間は塵も留めず、——外の人の混雑は、鯨に追われたような中に。――

一帆は誰よりも後れて下りた。もう一人も残らないから、女も出たには違いない。

三

が、拍子抜けのした事は夥多しい。

ストンと溝へ落ちたような心持ちで、電車を下りると、大粒ではないが、引包むように細かく降懸る雨を、中折で弾く精もない。

鼠の鏢をぐつたりとしながら、我慢に、吾妻橋の方も、本願寺の方も見返らないで、こ

こを的^{あて}に来たように、素直^{まつすぐ}に広小路を切つて、仁王門を真正^{まっしょうめいん}面^{めん}。

濡^ぬれても判明^{はつきり}と白い、処々^{じょじょ}むらむらと斑^ふが立つて、雨の色が、花簪^{はなかんざし}、箱狭子^{はこせこ}、輪^わ珠^{じゆず}数^{かず}などが落ちた形になつて、人出の混雑を思わせる、仲見世の敷石にかかつて、傍目^{わきめ}も触^ふらないで、御堂^{みどう}の方^{かた}へ。

そこらの豆屋で、豆をばちばちと焼く匂^{におい}が、雨を蒸して、暖かく顔を包む。

その時、広小路で、電車の口から颯^{さつ}と打った網の末^{すえ}が一度、混雑の波に消えて、やがて、向^{むき}のかわた仲見世へ、手元を細くすらすらと手繰寄せられた体^{てい}に、前刻^{さつき}の女が、肩を落して、雪かと思う襟脚細く、紺蛇目傘^{こんじやのめ}を、姿の柳に引掛^{ひっか}けて、艶^{つや}やかにさしながら、駒下駄^{こまげ}を軽く、褌^{つま}をはらはらとちと急いで来た。

と見ると、左側から猶^{なほ}予^よらわらないで、真中^{まんなか}へ衝^つと寄つて、一帆に肩を並べたのである。なよやかな白い手を、半ば露頭^{あらわ}に、翻然^{ひらり}と友染の袖を裾^{すそ}めて、紺蛇目傘をさしかけながら、

「貴下^{あなた}、濡れますわ。」

と言う。瞳^{ひとみ}が、動いて莞爾^{にっこり}。留南奇^{とめなき}の薫^{かおり}が陽炎^{かげろう}のような糠雨^{ぬかあめ}にしっかりと籠^{こも}つて、傘^{かさ}が透通^{ちかま}るか、と近増^{ちかま}りの美しさ。

一帆の濡れた額は快よい汗になって、

「いいえ、構わない、私は。」

と言った、がこれは心から素氣そっけのない意味ではなかった。

「だって、召物が。」

「何、外套がいとうを着ています。」

と別に何の知ち己かづきでもない女に、言葉を交わすのを、不思議とも思わないで、こうして
 二言三言、云う中うちにも、つい、さしかけられたままで五足六足いつあしむあし。花の枝を手に提げて、
 片袖重かたそでいような心持で、同じ傘からかさの中を歩行あるいた。

「人を見ます。」

どうして見るどころか、人脚の流るる中を、美しいしぶきを立てるばかり、仲店前を逆
 らって御堂の路みちへ上るのである。

また、誰が見ないまでも、本堂からは、門をうる抜けの見透みとおし一筋、お宮様でないのが
 まだしも、鏡があると、歴然ありありともう映ろう。

「御迷惑？」

と察したように低声こごえで言ったのが、なお色めいたが、ちつと蛇目傘じやのめを傾けた。

目隠しなど除れたかと、はつきりした心持で、

「迷惑どころじゃ……しかし穩ではありません。一人ものが随分通ります。」
とやつと苦笑した。

「では、別ツここに……」と云うなり、拗ねた風にするりと離れた。

と思うと、袖を斜めに、ちよつと隠れた状に、一帆の方へ蛇目傘ながら細りした背を見
せて、その絵草紙屋の店を覗めた。けばけばしく彩った種々の千代紙が、染むがごと
く雨に纏れて、中でも紅が来て、女の臉をほんのりとさせたのである。

今度は、一帆の方がその傍へ寄るようにして、

「どっちへいらつしやる。」

「私?……」

と傘の柄に、左手を添えた。それが重いもののように、姿が撓った。

「どこへでも。」

これを聞棄てに、今は、ゆつくりと歩行き出したが、雨がふわふわと思いのまま軽い風
に浮立つ中に、どうやら足許もふらふらとなる。

四

門の下で、後を振返つて見た時は、何店へか寄つたか、傍へ外れたか。仲見世の人通りは雨の臙に、ちらほらとより無かつたのに、女の姿は見えなかつた。

それきり逢わぬ、とは心の裡に思わないながら、一帆は急に寂しくなつた。

妙に心も更まつて、しばらく何事も忘れて、御堂の階段を……あの 大提灯の下を小さく上つて、厳かな廂を……欄干に添つて、廻廊を左へ、角の擬宝珠で留まつて、何やら吻と一息ついて、零するまでもないが、しつとりとする帽子を脱いで、額を手布で、ぐい、と拭つた。

「素面だからな。」

と歎息するように独言して、扱いて片頬を撫でた手をそのまま、欄干に肱について、遍く境内をずらりと視めた。

早いもので、もう番傘の懐手、高足駄で悠々と歩行くのがある。……そうかと思うと、今になって一目散に駆出すのがある。心は種々な処へ、これから奥は、御堂の背後、世間の裏へ入る場所なれば、何の卑怯な、相合傘に後れは取らぬ、と肩の聳ゆるまで

一人で氣競うと、雨も霞んで、ヒヤヒヤと頬に触る。一雫も酔覚の水らしく、ぞくぞくと快く胸が時めく……

が、見透しのどこへも、女の姿は近づかぬ。

「馬鹿な、それつきりか。いや、そうだろう。」
と打棄り放す。

大提灯にはたはたと翼の音して、雲は暗いが、紫の棟の蔭、天女も籠る廊から、鳩が二三羽、衝と出て翻々と、早や晴れかかる銀杏の梢を矢大臣門の屋根へ飛んだ。

胸を反らして空模様を仰ぐ、豆売りのお婆の前を、内端な足取り、裳を細く、蛇目傘をやや前下りに、すらすらと撫肩の細いは……確に。

スーと傘をすぼめて、手洗鉢へ寄った時は、衣服の色が、美しく湛えた水に映るか、この欄干から遥かな心に見て取られた。……折からその道筋には、件の女ただ一人で。

水色の手巾を、はらりと媚かしく口に啣えた時、肩越に、振仰いで、ちよいと廻廊の方を見上げた。

のめのめとそこに待っていたのが、了簡の余り透く気がして、見られた拍子に、ふらりと動いて、背後向きに横へ廻る。

パツパツと田舎の親仁が、掌へ吸殻を転がして、煙管にズーズーと脂の音。くく、とどこかで鳩の声。茜の姉も三四人、鬱金の婆様に、菜畠の阿媽も交つて、どれも口を開けていた。

が、あ、と押魂消て、ばらりと退くと、その横手の開戸口から、艶麗なのが、すうと出た。

本堂へ詣つたのが、一廻りして、一帆の前に頭われたのである。
すぼめた蛇目傘に手を隠して、

「お待ちなすつて？」

また、ほんのりと花の薫。

「何、ちつとも。……ゆつくりお参詣をなされば可い。」

「貴下こそ、前へいらしってお待ち下されば可うござんすのに、出張りにいらしつて、沫が冷いではありませんか。」

さつさと先へ行けではない。待つてくれれば、と云う、その待つのはどこか、約束も何もしないが、もうこうなつては、度胸が据つて、

「だつて雨を潜つて、一人でびしょびしょ歩行けますか。」

「でも、その方がお好な癖に……」

と云つて、肩でわざとらしくない嬌態をしながら、片手でちよいと帯を圧えた。ぱちん留が少し摺つて、……薄いが膨りとある胸を、緋鹿子の下メ《したじめ》が、八ツ口から溢れたように打合わせの縷子を覗く。

その間に、きりりと挟んだ、煙管筒？ ではない。象牙骨の女扇を挿している。今圧えた手は、帯が弛んだのではなく、その扇子を、一息探く挿込んだらしかった。

五

紫の矢絰に箱迫の銀のぴらぴらというなら知らず、闇桜とか聞く、暗いなかにフト忘れたように薄紅のちらちらする凄い好みに、その高島田も似なければ、薄い駒下駄に紺蛇目傘も肖わない。が、それは天気模様で、まあ分る。けれども、今時分、扇子は余りお儀式過ぎる。……踊の稽古の帰途なら、相応したのがあろうものを、初手から素性のおかしいのが、これで愈々不思議になった。

が、それもその筈、あとで身上を聞くと、芸人だと言う。芸人も芸人、娘手品、と

云うのであつた。

思ひ懸けず、余り変つてはいたけれども、当人の女の名告るものを、怪しいの、疑わしいの、嘘言だ、と云つた処で仕方がない。まさか、とは考えるが、さて人の稼業である。此方から推着けに、あれそれとも極められないから、とにかく、不承々々に、そうか、と一帆の領いたのは、しかし観世音の廻廊の欄干に、立並んだ時ではない。御堂の裏、田圃の大金の、とある数寄屋造りの四畳半に、膳を並べて差向つた折からで。……

もつとも事のそこへ運んだまでに、いささか気になる道行の途中がある。

一帆は既に、御堂の上で、その女に、大形の紙幣を一枚、紙入から抜取られていたのであつた。

やつぱり練磨の手術であろう。

その時、扇子を手で圧えて、貴下は一人で歩行く方が、

「……お好な癖に……」

とそう云うから、一帆は肩を揺つて、

「こうなつちやもう構やしません。是非相合傘にして頂く。」と威すように云つて笑つた。

「まあ、駄々ッ児のようだね。」

と莞爾にっこりして、

「貴方あなた、」と少し改まる。

「え。」

「あの、少々お持合わせがござんすか。」

と澄まして言う。一帆はいささか覚悟はしていた。

「ああ。」

とわざと鷹揚おうように、

「幾千いくちばかり。」

「十枚。」

と胸を素直まっすぐにした、が、またその姿も佳よかった。

「ちよいと、買物がしたいんですから。」

「お持ちなさい。」

この時、一帆は背後うしろに立った田舎ものの方を振向いた。皆みんな、きよろりきよろりと視ながめた。女は、帯にも突込つっこまず、一枚掌たなそこに入れたまま、黙って、一帆に擦違すれちがって、角の擬宝珠ぎぼしゅを廻めぐって、本堂正面の階段の方へ見えなくなる。

大方、仲見世へ引返したのであろう、買物をするといえは。

さて何をするか、手間の取れる事一通りでない。

煙草たばこももう吸い飽きて、拱こまぬいてもだらしなく、ぐつたりと解ける腕組みを仕直し仕直し、

がつくりと仰向あおむいて、唇をぺろぺろと舌で嘗なめる親仁おやじも、蹲しゃがんだり立ったりして、色氣の

ない大欠伸おおあくびを、ああとする茜あかねの新姐しんぞも、まんざら雨宿りばかりとは見えなかった。が、

綺麗な姉様あねさまを待飽倦まちあぐんだそうで、どやどやと横手の壇おを下り懸おけて、

「お待遠まちどおだんべいや。」

と、親仁がもつともらしい顔色かおつきして、ニヤリともしないで吐はきくと、女どもは哄どっと笑つ

て、線香の煙の黒い、吹上げの沫しぶきの白い、誰彼たそがれのような中へ、びしょびしょと入って行ゆ

く。

吃驚びっくりして、這奴等しやつら、田舎ものの風をする拘賊すりか、ポン引ひきか、と思った。軽くなった懷ふ

中ところにつけても、当節は油断がならぬ。

その時分まで、同じ処にぼんやりと立って待ったのである。

早く下りよ、と段はそこに階きざはしを明けて斜めに待つ。自分に恥じて、もうその上は待つて
いられないまでになつた。

端へ出るのさえ、後を慕つて、紙幣さつひきずに引摺られるような負惜まけおしみの外間があるので、角
の処へも出ないでいた。なぜか、がっかりして、気が抜けて、その横手から下りて、路みちを
廻るのも億劫おつくうでならぬので、はじめで、ふらふらと前へ出て、元の本堂前の廻廊を廻つ
て、欄干について、前刻来さつきがけとは勢いきおいが、からりとかわつて、中折なかおれの錨つばも深く、面おもてを伏
せて、そこを伝う風も、我ながら辿たど々しかつた。

トあの大提灯を、釣鐘が目前めのまえへぶら下つたように、ぎよつとして、はつと正面へ魅つまま
れた顔を上げると、右の横手の、広前ひろまえの、片隅に綺麗に取つて、時ならぬ錦木にしきぎが一ひと
本と、そこへ植わつた風情に、四辺あたりに人もなく一人立つて、傘からかさを半開き、真白まっしろな横顔を
見せて、生際はえぎわを濃く、美しく目迎えて莞爾にっこりした。

「沢山たん、待たせてさ。」と馴々なれなれしく云うのが、遅くなつた意味には取れず、逆さかに怨さまうらんで
聞える。

言葉戦かない合うまじ、と大手を拡げてむずと寄つて、

「どこにしましょう。」

「どちらへでも、貴下のお宜しい処が可うござんす。」

「じゃ、行く処へいらつしやい。」

「どうぞ。」

ともう、相合傘の支度らしい、片袖を胸に当てる、柄よりも姿が細りする。

丈がすなりと高島田で、並ぶと蛇目傘の下に對。

で、大金へ入った時は、舟崎は大胆に、自分が傘を持っていた。

けれども、後で氣が着くと、真打の女太夫に、恭しくもさしかけた長柄の形で、舟崎

の図は宜しくない。

通されたのが小座敷で、前刻言つたその四畳半。廊下を横へ通口がちよつと隠れて、

氣の着かぬ処に一室ある……

数寄に出来て、天井は低かつた。畳の青さ。床柱にも名があろう……壁に掛けた籠に躰

豆のふつくりと咲いた真白な花、蔓を短かく投込みに活けたのが、窓明りに明く灯を

点したように見えて、桃の花より一層ほんのりと部屋も暖い。

用を聞いて、円鬘に結つた女中が、しとやかに扉を閉めて去つたあとで、舟崎は途中も

汗ばんで来たのが、またこう籠こもつたので、火鉢を前に控えながら、羽織を脱いだ。

それを取って、すらりと扱しごいて、綺麗に畳む。

「これは憚はばかり、いいえ、それには。」

「まあ、好きにおさせなさいまし。」

と壁の隅へ、自分の傍わきへ、小膝こひざを浮かして、さらりと遣やつて、片手で手巾ハンケチを捌さばきながら、

「ほんとうにちと暖か過ぎますわね。」

「私は、逆のぼせ上るからなお堪たまりません。」

「陽気のせいですね。」

「いや、お前さんのためさ。」

「そんな事をおっしゃると、もつと傍そばへ。」

と火鉢をぐい、と圧おして来て、

「そのかわり働いて、ちつと開けて差上げましょう。」

と弱々と斜ななめにひねった、着流しの帯のお太鼓の結目むすびめより低い処に、ちょうど、背後うしろの壁を仕切つて、細い潜くぐり窓の障子がある。

カタリ、と引くと、直ぐに囲いの庭で、敷松葉を払ったあとらしい、ふき露の葉が芽めぐんだように、飛石が五六枚。

柳の枝折戸、四ツ目垣。

トその垣根へ乗越して、今フト差さ覗いた女の鼻筋の通った横顔を斜はす違つかいに、月影に映す梅の楚ずのわえごとく、大なる船の舳へがぬつと見える。

「まあ、可いいこと！」

と嬉しそうに、なぜか仇あどけ気ない笑顔になった。

七

「池があるんだわね。」

と手を支ついて、壁に着いたなりで細ほりした頤おとがを横にするまで下から覗のぞいた、が、そこからは窮屈で水は見え、忽こっ然ぜんとして舳へばかり頭あわれたのが、いっそ風情であつた。

カラカラと庭下駄が響く、とここよりは一段高い、上の石畳みの土間を、約束の出であらう、裾模様の後姿で、すらりとした芸者が通つた。

向うの座敷に、わやわやと人声あり。

枝折戸しおりどの外を、柳の下を、がさがさと箒ほうきを当てる、印半纏しるしばんてんの円い背せなかが、蹲うずくまって、はじめから見えていた。

それには差構さくまいなく覗いた女が、芸者の姿に、密そつと、直ぐに障子を閉めた。

向直った顔が、斜めに白い、その豌豆えんどうの花に面した時、眉を開いて、熟じつと視みた。が、瞳を返して、右手めてに高い肱掛窓ひしかけまどの、障子の閉ったままなのを屹きつと見遣みやった。

咄嗟とつさの間の艶麗あでやかな顔の働きは、たとえば口紅を衝つと白粉おしろいに流して稲妻を描いたごとく、媚なまめかしく且つ鋭いもので、敵あり迫らば翡翠ひすいに化して、窓から飛んで抜けそうに見えるたのである。

一帆は思わず坐り直した。

処へ、女中せんが膳ぜんを運んだ。

「お一ツ。」

「天気は？」

「可塩梅いあいあんばいに霽あがりました。……ちと、お熱過ぎはいたしませんか。」

「いいえ、結構。」

「もし、貴女。^{あなた}」

女が、もの馴^なれた状で猪口^{ちよく}を受けたのは驚かなかつたが、一ツ受けると、

「何うぞ、置いて去^いらして可^ようござんす。」と女中を起^たたせたのは意外である。

一帆はしばらくして陶然^{とうぜん}とした。

「更^{あらた}めて、一杯^{ひとつ}、お知己^{ちかづき}に差上げましょう。」

「極^{きまり}が悪うござんすね。」

「何の。そうしたお前さんか。」

と膝をぐつたり、と頭^{こうべ}を振つて、

「失礼ですが、お住所^{ところ}は？」

「は、提灯^{ちようちん}よ。」

と目許^{めもと}の微笑^{ほほえみ}。丁^{ちよう}と、手にした猪口を落すように置くと、手巾^{ハンケチ}ではっと口を押えて、

自分でも可笑^{おかし}かつたか、くすくす笑う。

「町名、町名、結構。」

一帆は町名と間違えた。

「いいえ、提灯なの。」

「へい、提灯町。」

と、けろりと馬鹿氣た目とろでいる。

また笑つて、

「そうじやありません。私の家は提灯なんです。」

「どこの？ 提灯？」

「観音様の階段の上の、あの、大な提灯の中が私の家です。」

「ええ。」と云つたが、大概察した。この上尋ねるのは無益である。

「お名は。」

「私？ 名ですか。娘……」

「娘むすめこ子さん。——成程違いない、で、お年とし紀は？」

「年は、婆さん。」

「年は婆さん、お名は娘、住所ところは提灯の中でおいでなさる。……はてな、いや、分りまし

た……が、お商売は。」

と訊きいた。

後に舟崎が語つて言うよう——

いかに、大の男が手玉に取られたのが口惜い（くやし）といって、親、兄、姉をこそ問わずもあれ、妙齡（としごろ）の娘に向つて、お商売？ はちと思切つた。

しかし、さもしいようではあるが、それには廻廊の紙幣（さつ）がある。

その時、ちと更（あらた）まるようにして答えたのが、

「私は、手品をいたします。」

近頃はただ活動写真で、小屋でも寄席（よせ）でも一向（い）入りのない処から、座敷を勤めさして頂く。

「ちよいと嬰兒（あか）さんにおなり遊ばせ。」

思懸（おもひが）けない、その御礼（ごれい）までに、一つ手前芸（てまへげい）を御覧（ごらん）に入れる。

「お笑い遊ばしちや、厭（いや）ですよ。」と云う。

「これは拝見（おひめい）！」と大袈裟（おおげさ）に開き直つて、その実は嘘（うそ）だ、と思つた。

すると、軽く膝（ひざ）を支（た）いて、蒲団（ふとん）をずらして、すらりと向うへ、……扉（ひらき）の前。——此方（こなた）に

劣（さか）らず杯（さかずき）は重ねたのに、衣（きぬ）の薫（かおり）も冷（ひや）りとした。

扇子（せんし）を抜いて、畳（たたみ）に支（た）いて、頭（つむり）を下（さ）げたが、がっくり、と低頭（うなだ）れたように悄（しお）れて見えた。

「世渡り（よわたり）のためとは申しながら……前（さき）へ御祝儀（ごしゆぎ）を頂（う）いたり、」

と口籠^{くちごも}って、

「お恥かしゆう存じます。」と何と思つたか、ほろりとした。その美しきは身に染みて、いまだ夢にも忘れぬ。

いや、そこどころか。

あの、籠^{かご}の白い花を忘れまい。

すつと抜くと、掌^{てのひら}に捧げて出て、そのまま、櫺子^{れんじまど}窓の障子を開けた。開ける、と中庭

一面の池で、また思懸^{かすみ}けず、船が一舳^{そう}、隅田に浮いた鯨のごとく、池の中を切劃^{しき}つて浮く。

空は晴れて、霞^{かすみ}が渡つて、黄金のような半輪の月が、薄^{うつつ}りと、淡い紫の羅^{うすもの}の樹立^{こだち}の影を、

星^{ちりば}を鏤^{おた}めた大松明^{おたいまつ}のごとく、電燈とともに水に投げて、風の余波^{なごり}は敷^{しき}妙^{たえ}の銀の波。

ト瞻^{みつ}めながら、

「は、」と声^{こゑ}が懸^かる、袖を絞^{たもと}つて、袂^{たもと}を肩へ、脇^{わき}明^{あけ}白^{ひと}花^{ひら}一片、手^{すべ}を這^{すべ}つたか、と思
うと、非^{あら}ず、緑の蔓^{つる}に葉を開いて、はらりと船へ投げたのである。

ただ一攫^{ひとつま}みなりけるが、船の中に落つると齊^{ひと}しく、礫^{つぶて}打^つつた水の輪のように舞つて、
花は、鶴^はの羽^はのごとく舳^{へさき}にまで咲きこぼれる。

そのときりりと、銀の無地の扇子を開いて、かざした袖の手^てのしなないに、ひらひらと池

を招く、と澄すみとお透る水に映つて、ちらちらと揺めいたが、波を浮いたか、霞を落ちたか、その大さおおき、やがて扇ばかりな真白まっしろな一羽の胡蝶こちょう、ふわふわと船の上に踊あわられて、つかず、離れず、豌豆えんどうの花に舞う。

やがて蝶が番つがいになった。

内は寂然ひっそりとした。

芸者の姿は枝折戸しおりどを伸上った。池を取廻とりまわした廊下には、欄干てすりごし越に、燈籠とうろうの数ほど、ずらりと並ぶ、女中の半身。

蝶は三ツになった。影を沈めて六ツの花、巴ともえに乱れ、卍まんじと飛交う。

時にそよがした扇子を留めて、池を背後うしろに肱掛窓ひじかけまどに、疲れたように腰を懸ける、と同じ処に、肱ひじをついて、呆氣あつけに取られた一帆と、フト顔を合せて、恥じたる色して、扇子をそのまま、横に背そむいて、胸越おほしに半面を蔽おほうて差俯さしうつむ向く時、すらりと投げた裳もすそを引いて、足袋の爪先を柔かに、こぼれた棲つまを寄せたのである。

フト現うつから覚めた時、女の姿は早やなかった。

女中に聞くと、

「お車で、
たった今……」

明治四十四（一九一三）年二月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成⁴」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年10月24日第1刷発行

2004（平成16）年3月20日第2刷発行

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2005年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

妖術

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>